

第3部会

キルケゴールからの影響を見出すことができる。ハイデガーは「カール・ヤスパースの『世界観の心理学』に寄せる論評」で、キルケゴールによってなされたような厳密な方法意識はめったに達成されなかったこと、そしてこの方法意識が見落とされるならば、キルケゴールの決定的なものが手放されるということを通じて述べている。「方法意識」とは「間接的伝達」を指していると思われる。ハイデガーの形式的告示もまた、形式と内容が不可分に呼応するような方法であり、「形式的」とは、世界内存在の、したがって気遣いの構造を意味している。ハイデガーの現象学は、キルケゴールの諸概念を「志向的関わり」として捉え直すことによって、キルケゴールの方法意識を受け継いでいるのである。

ハイデッガーと洞窟の比喩

—— 哲学者の死について ——

田 鍋 良 臣

「哲学の終わり」。この言葉はハイデッガー思想の代名詞として広く流通している。だがその意味するところは言葉の容易さに比べ、難解である。はたして「哲学の終わり」とは何か。それを知る手がかりが晩年に発表された「哲学の終りと思索の課題」(一九六六)の冒頭で与えられている。ハイデッガーによると、このタイトルが示すのは「一九三〇年以來くりかえし企てられた試み、『存在と時間』の問題設定をより始源的に形成

すること」(SD, 61)である。ところで、「哲学の終わり」と関係がありそうな問題、「哲学者の死」がはじめて論じられたのは、まさしく引用にある「一九三〇年」直後のことである。それはプラトンの「洞窟の比喩」(以下「比喩」と略記)解釈の中で登場した。「比喩」解釈は一九三〇年以前にも見られるが、そこでは「哲学者の死」は注目されておらず、むしろ「比喩」に即して「存在と時間」構想の仕上げが重ねられている。ゆえに、「哲学者の死」が「哲学の終わり」を示唆するならば、一九三〇年を境にしてなされた「比喩」解釈の変容のうちには、「存在と時間」の問題設定をより始源的に問うこと、鋭く言えば、「存在と時間」の問題設定を内在的な批判にかけること」(SD, 61)の痕跡が残されていると考えられる。

本発表は、以上のような見通しのもと、一九三〇年前後での「比喩」解釈を「存在と時間」の問題設定」に注目しつつ、以下の二点にまとめた。①一九三〇年以前の「比喩」解釈は、「形而上学の基礎づけ」を画策する『存在と時間』構想のいわば「設計図」を担っている。洞窟からの解放は基礎的存在論として、洞窟への帰還はメタ存在論としてそれぞれ解釈することができる。だが「比喩」解釈の最終局面で、哲学の始源である神話／宗教の問題にぶつかり、その概念把握をめぐってハイデッガーは動揺する。②一九三〇年以後の「比喩」解釈は一転、基礎的存在論に属する現存在分析のみ即したものとなる。ここではじめて、洞窟への帰還に際して「哲学者の死」が問題となり、同時に、「真理(隠れなき)の本質に非真理(隠れ)が属する」ことが、根源的な仕方であらわとなる(GA34, 90f.)。

ハイデッガーによれば、非真理としての隠れは、プラトン以来の形而上学においては根本的に経験されていない (vgl. GA34, 93)。にも拘わらず、隠れが哲学の探求する隠れなき(真理)の本質に属する限り、隠れを経験しえない形而上学は自身の始源に対してどこまでも「無的無力」なままに留まらざるをえない (GA34, 84)。同じことは「形而上学の基礎づけ」を企図した『存在と時間』の問題設定にも言える。なぜなら、その核となる「現存在の超越」の「暴露」のうちでは、隠れそのものは隠れてしまうからである。隠れはそもそも光のもとに来ることはできない。「哲学者の死」が隠れの根本生起と同じ場面で、それも現存在分析に即して語られたこと自体、そのことを物語っているように思われる。ハイデッガーはこうした「非-真理」の「非-」性格にいわゆる「存在の真理」を見るのだが (WJM, 193f.)、それを語るにはもはや形而上学の言葉では間に合わず、ここで「形而上学の超克」が要請される (GA34, 324)。求められるのは、形而上学とは別の言葉となる。

以上、一九三〇年前後の「比喻」解釈の変容をあとづけることで、「形而上学の基礎づけ」を意図してなされた「根拠への帰還」が、形而上学自身の「没落 (zu Grunde gehen)」へと移行するさまを確認した。それはまさしく「哲学の終わり」と呼ぶにふさわしいであろう。だがこの「終わり」は思索にとつてなんら消極的なものではない。少なくともハイデッガー自身、「終わり」を「別のものに向けての終わり」(SD, 63)と見ている。「比喻」解釈を通じて展開された「真理概念の」歴史

への真正な帰還は、本来的な将来性の決定的な始源」(GA34, 10)を準備するのである。「別の始源」への問いは、すでに開かれている。

Sein zum Tode 再考

——ハイデッガー『存在と時間』と「死」の概念——

松本直樹

ハイデッガーが『存在と時間』の後半で論じる「死 (Tod)」の概念を十分に理解することはきわめて困難であるが、この発表では試みに一つの解釈を提示し、この解釈のもとではじめて『存在と時間』の後半の議論が統一的に理解できることを示したい。

ハイデッガーが死を問題にするのは人間存在の全体をその終わりに至るまで残りなく見届けるためであるが、それはたとえば、様々なことを見、ばらばらにしている人に「要するに何をしているのか」と問うことに似ている。「終わり」に相当するドイツ語 Ende は「目的」「趣旨」という意味でもあって、「全体を終わりまで見届ける」とは、一見、ばらばらに目撃される人間存在の様々なあり方を、その全体を包括する究極的な趣旨において理解する、ということである。

とはいえ、それでは人間存在の究極的な趣旨は死であって、生とは「要するに」死であるということになるのか。ここで